

イエスのことば 第 46 回

さて、弟子たちの間で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった。しかし、イエスは彼らの心にある考えを知り、一人の子どもの手を取って、自分のそばに立たせ、彼らに言われた。「・・・あなたがた皆の中で一番小さい者が、一番偉いのです。」(ルカ 9 : 46~48)

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。
2. 紀元 29 年の春、過越の祭りの頃から、同年の秋、仮庵の祭りまでの、約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。異邦人地域への 4 回の旅行は、**退避（リトリート）と休息の時**であったと同時に、**弟子たちの訓練**を目的とした。
3. リトリート第 4 回、ピリポ・カイサリアへ行ったときの出来事として特筆すべきは、ペテロの信仰告白、そして高い山（おそらくヘルモン山）での変貌の出来事であった。
4. 前回は、山を下りてきて、ほかの 9 人の弟子たちとの合流地点に来たときの出来事であった。あるユダヤ人の父と子、そしてイエスの動向を監視する監視団がイエスを追っかけて来ていた。イエスはその父親の信仰を導き、口をきけなくする悪霊につかわれていた子を救った。
5. これでもって、4 回にわたる異邦人地域へのリトリートは終了した。今回は、イエスの伝道拠点であったガリラヤのカペナウムへの帰路でなされた「死と復活の予告」、そして帰還したあとになされた、弟子たちへの実際的な教えについて、である。

カペナウム帰還 実際的な教え

マタイ 17 : 22~18 : 35、マルコ 9 : 30~50、ルカ 9 : 43~50

□アウトライン

- | | | |
|-------------------------------------|---|-----|
| A) 死と復活の予告（第 2 回目） | } | 4 月 |
| B) 弟子たちの関心事：誰が一番偉いか | | |
| C) 神殿税の納入：人を無用につまづかせるな | | |
| D) 誰が一番偉いかなどと議論せずに、子どものように自分を低くしなさい | | |
| E) 子どもをつまづかせるな | } | 5 月 |
| F) 教会の信者たちが「互いに平和に過ごす」ための教え | | |

A) 死と復活の予告 (第 2 回目)

カペナウムへの帰還の途上、イエスの死と復活の予告 (第 2 回目、1 回目はピリポ・カイサリアにて)。この第 2 回目の予告は、カペナウムに向けて出発する前、向かっている途上、そしてカペナウムに到着したとき、と繰り返し告げられた。

1. カペナウムに向けて出発する前

ルカ 9: 43b~45 イエスがなさったすべてのことに人々がみな驚いていると、イエスは弟子たちにこう言われた。「あなたがたは、これらのことばを耳に入れておきなさい。人の子は、人々の手に渡されようとしています。」しかし、弟子たちには、このことばが理解できなかった。彼らには分からないように、彼らから隠されていたのであった。彼らは、このことばについてイエスに尋ねるのを恐れていた。→「イエスがなさったすべてのこと」=ピリポ・カイサリアにて、口をきけなくする霊を追い出した奇跡。「弟子たちにこう言われた」、驚嘆している人々の前で言ったのではなく、あとで弟子たちだけに語られた。

2. 向かっている途上

マルコ 9: 30~32 さて、一行はそこを去り、ガリラヤを通って行った。イエスは人に知られたくないと思われた。それは、イエスが弟子たちに教えて「人の子は人々の手に引き渡され、殺される。しかし、殺されて三日後によみがえる」と言っておられたからである。しかし、弟子たちにはこのことばが理解できなかった。また、イエスに尋ねるのを恐れていた。→「そこを去り」=ピリポ・カイサリアを去り、「ガリラヤを通って行った」=ガリラヤ地方に入り、カペナウムに向かっている。

3. カペナウムに到着したとき

マタイ 17: 22~23 彼らがガリラヤに集まっていたとき、イエスは言われた。「人の子は、人々の手に渡されようとしています。人の子は彼らに殺されるが、三日目によみがえります。」すると彼らはたいへん悲しんだ。

B) 弟子たちの関心事：誰が一番偉いか

カペナウムに向かう途上で、弟子たちは、自分たちの中でだれが一番偉いかを論じ合った。イエスの死と復活の予告は弟子たちには理解しがたく、また悲しいことであったが、メシアの王国が近いはず、と考へ、では建国の際には自分たちの地位序列はどうなるのか、と議論になったわけである。カペナウムに着くと、イエスは弟子たちに何を議論していたのかと、お尋ねになった。もちろん、イエスは弟子たちの心の中を知っておられた。

マルコ 9:33~34 一行はカペナウムに着いた。イエスは家に入ってから、弟子たちにお尋ねになった。「来る途中、何を論じ合っていたのですか。」彼らは黙っていた。来る途中、だれが一番偉いか論じ合っていたからである。

C) 神殿税の納入：人を無用につまずかせるな

カペナウムに帰還すると、神殿税を集める人たちが弟子のペテロのところに来た。イエスたち一行は、異邦人地域を旅行していたので、毎年の納税の時期に不在で、神殿税を納めていなかったからである。

1. 神殿税を集める人たちへのペテロの勝手な返答

マタイ 17:24~25a 彼らがカペナウムに着いたとき、神殿税を集める人たちがペテロのところへ近寄って来て言った。「あなたがたの先生は神殿税を納めないのですか。」彼は「納めます」と言った。

→「神殿税」はモーセの律法にはない。バビロン捕囚から帰還し、神殿祭儀の維持のための神殿税として、ネヘミヤの時代に三分の一シェケルを毎年納める制度を設けたのが、始まり（ネヘミヤ記 10:32）。イエスの時代には、イスラエルの男子が毎年納める神殿税の金額は、半シェケルとなっていた。当時の労働者の二日分の労賃に相当。

→神殿税の納入は、通常、過越の祭りの6週間前まで。すでにその時期を半年ほど過ぎていた。

2. イエスからペテロへの教え① イエスとイエスの信者たちは神の子であるから神殿税を納める義務はない

マタイ 17:25b~26 そして家に入ると、イエスのほうから先にこう言われた。「シモン、あなたはどう思いますか。地上の王たちはだれから税や貢ぎ物を取りますか。自分の子たちからですか、それとも、ほかの人たちからですか。」ペテロが「ほかの人たちからです」と言うと、イエスは言われた。「ですから、子たちにはその義務がないのです。

→ローマ帝国の制度では、「自分の子たち」=自国民、「ほかの人たち」=属国の民。ローマ市民は納税の義務はない。税や貢ぎ物を納めるのは、ローマの属国の人々。ローマ以外の国の制度では、「自分の子たち」=王の子たち。王の子たちには、納税の義務はない。

いずれの国の制度によっても、神殿の主はメシア、メシアの信者たちは、神の国の民か、神の子たちに当たる。よって、イエスはもちろん、ペテロも、神殿の納税義務はない、というのが、ここでの教え。

3. イエスからペテロへの教え② 神殿税を集める人たちをつまずかせないための配慮
マタイ 17:27 しかし、**あの人たちをつまずかせないために**、湖に行って釣り糸を垂れ、最初に釣れた魚を取りなさい。その口を開けるとスタテル銀貨一枚が見つかります。それを取って、わたしとあなたの分として納めなさい。」
→スタテル銀貨はギリシアの通貨、ユダヤ銀貨の1シェケルに相当し、二人分の神殿税を納めることができた。

イエスがここでペテロに教えた実際的な心得は、**【人を無用につまずかせないこと】**

D) 誰が一番偉いかなどと議論せずに、子どものように自分を低くしなさい

イエスのご自分の神殿税といっしょにペテロの神殿税も納入したことがきっかけとなって、弟子たちの間で「ではペテロが一番なのか？」という議論が起きたようである。カペナウムに来る途上でも議論したことの再燃である。弟子たちがイエスのところに来て、「メシアの王国では、いったいだれが一番偉いのですか」と質問してきた。

マタイ 18:1~4 そのとき、弟子たちがイエスのところに来て言った。「天の御国では、いったいだれが一番偉いのですか。」イエスは一人の子どもを呼び寄せ、彼らの真ん中に立たせて、こう言われた。「まことに、あなたがたに言います。向きを変えて子どもたちのようにならなければ、決して天の御国に入れません。ですから、だれでもこの子どものように自分を低くする人が、天の御国で一番偉いのです。」

マルコ 9:35 イエスは腰を下ろすと、十二人を呼んで言われた。「だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後になり、皆に仕える者になりなさい。」

ルカ 9:46~48 さて、弟子たちの間で、だれが一番偉いかという議論が持ち上がった。しかし、イエスは彼らの心にある考えを知り、一人の子どもの手を取って、自分のそばに立たせ、彼らに言われた。「・・・あなたがた皆の中で一番小さい者が、一番偉いのです。」